東南アジア考古学会 TAIWAN 考古学セミナー・シリーズ
《台湾考古学の新視点》第 1 回要旨

台湾考古学から原住民の古代史を探る

陳有貝（国立台湾大学人類学系）

一、原住民の歴史的な課題

(1) 台湾原住民の概要

17 世紀以降の近世より、台湾に関する文献記録が徐々に増え始める。それらの記載に基づくと、17 世紀初め頃の台湾原住民の人口（漢民族を除く）はおおよそ 15 万人と推計されている。また、フィールドワークによる調査から、彼らは新たに移住してきた漢民族と全く異なり、言語学の分野においてオーストロネシア語族（あるいは南島語族）に属することが判明している。そして 20 世紀末から台湾政府は彼らに対し「原住民」の呼称を与え現在に至る（以下特にことわらない限り「原住民」とは「台湾原住民」を指す）。

漢民族が大量に移住してくる前の台湾の状況については、古代中国の史料が少しばかり見られるほか、17 世紀以降に台湾に関する各国の文献記録が増加することで、原住民の様相がようやく世界の目に触れるようになった。

考古学の分野において、台湾の先史時代は原住民族の古代史として理解され、その一方で近現代の原住民に関する事実は、先史時代の研究（解釈）において極めて有用な情報源と考えられている。この点が台湾考古学の特色の一つであることは間違いない。

(2) 原住民研究の課題

台湾の原住民については、言うまでもなく歴史的な研究課題が数多くある。例えば、彼ら／彼女らはどこから台湾へやって来たのかという問題である。現在、中国の福建省の南部から広東省までの沿岸部がその起源地であると、台湾の研究者たちは認識している。

しかし、それ以後、先史時代の台湾人がどこへ向かって行ったのか、あるいは、台湾が太平洋の島々の民族（オーストロネシア語族）の起源地かどうかといった問題については、賛成と反対の意見に分かれているというのが現状であり、今後さらに決定的な証拠を見つけることが重要となる。

近年、原住民の「族」の問題に対して非常に関心が集まっている。「族」という概念は、その厳密な定義はないものの、台湾原住民の世界において厳然として存在し無視できないものである。それゆえ、各々の「族」の由来や歴史は、当該研究において極めて重要な領域となっている。従来、「族」の分類は、原住民研究の基本といわれ、その具体的な作業としては、通常、言語をはじめ、さまざまな資料を総合的に分析し、基準属性の異同により、該当する「族」に区分することにある。現時点で、近世以来の台湾には、少なくとも 20 以上の「族」が存在していたと認識されている。

それでは、なぜ台湾島には原住民の「族」がこれほど多く存在しているのであろうか。そ

の説明に関して、概して多元論の立場である「多民族移民説」と一元論の立場である「環境適応説」の二つの説がよくあげられる。「多民族移民説」とは、すでに先史時代から、数多くの異なるグループが異なったタイミングで異なった地域から台湾に移住してきたという説である。もともと同じではないグループであったからこそ台湾でそのまま存続し、結果として当然数多くの原住民グループがいるというわけである。一方、「環境適応説」は、台湾島内の高山、丘陵、盆地、平野などさまざまな自然環境の存在が強調され、最初に台湾島に移住してきた集団がそうした多様な環境に長期にわたって適応した結果、各々の地域グループが形成されたという主張である。

二、考古学から「族」の歴史を解明する

もう一つの議論は、いわゆる「族」古来の源流および歴史についてである。従来、それは文化人類学者が最も重要視するテーマであるが、原住民の口頭伝承や伝説・神話等は二次的な資料としてしか扱うことができない。つまり、それらはすべてにおいて客観的な事実を示すとは限らず、むしろ考古学方面の知識が当該課題に役立つと考えられる。考古学は、実際に発生したことから残ったものを根拠資料として、歴史を追求する学問分野である。台湾原住民の古代史の解明において考古学はその鍵を握っており、重要性は高いといえる。

台湾原住民の間において「族」が現象として客観的に存在することを否定はできない一方、文化人類学者の間では「族」あるいはエトノスに関する認識も少しずつ変化しており、現在では人間の主観的な認識によるものと定義する研究者が増えてきている。では、先史時代を扱う考古学研究において、「族」に関する根拠をいかに捉えればよいのであろうか。ここで歴史学や民族学、人類学の資料を参照するならば、「共同の祖先」（「共祖」）がキーワードとなると思われる。

「共祖」という概念は、理論的にみて、疑いのない血縁関係に基づくものである一方、実際に人為的に支配を及ぼすものである。その目的は、人間を集団に帰属させ、集団的な影響力を及ぼすことにある。さらに加えて、人間が「共祖意識」を固めるために、祖先に関する象徴物を「創造」し、その意識を具体化させるという例も少なくない。そうすると、「共祖」を象徴するものを探し出すことによって、台湾の「族」の意識の存在を証明できると思われるのである。

研究例の一つであるパイワン族は、台湾南部に暮らす原住民である。同族は、山地の環境に適応するため、数多くのスレート製の家屋（石板屋）を築き、特色ある考古学データを残している。パイワン族の歴史はいつ頃に遡るのであろうか。かつて民族学者は、伝説をもとに彼らが今から 500 年前に海外から移住してきたといったんは推測した。しかし、近年の考古学の研究成果によりその認識は大きく変化している。

1980 年代に台湾南部に位置する亀山遺跡から屈曲した記号のような図案の土器が出土している。発掘当時その意味は不明のまま記録されてしまったが、その約 20 年後、台湾東南部の旧香蘭遺跡から比較可能な類例が数多く出土し、ようやくそれがヘビを意味することが判明したのである。

旧香蘭遺跡には土器や石庖丁にそれぞれ一匹の「ヒャッポダ」（百歩蛇）の単蛇体図案があ

り、原初的な記号、具象的なヘビ形文の両種類を有する。また、二匹の蛇の体躯を逆にして並べた双蛇体図案が骨器に刻まれている。全体を概観してみると、ヒャッポダの象徴的な意味がすでに定着し、村民の間で相当程度、精神面における共同（体）意識を持っているようにも感じられる。

ヒャッポダのほか、同一スタイルを持つ人像や頭像の図案が多数の土器の表面に刻まれている。時期は下り、近代において民族学者が収集した資料にも、ヒャッポダと人間が一緒に並んで表現された図案が認められる。旧香蘭遺跡の図案が、いわゆるパイワン族の祖先のシンボルと一致することは明らかであり、この段階までにパイワン人の「共祖」意識が成立したと考えることもできる。このような事例から、考古学の資料において、地域集団より「族」と称される共同体が生まれるプロセスを解明できる可能性を指摘しておきたい。

三、おわりに

台湾の先史時代の遺跡のほとんどは、原住民の祖先が残したものと認識されている。ゆえに考古学はそれら原住民の古代史の探究を可能とする学問である。

1980 年代以降、台湾では大規模な緊急発掘が増加し、より多くの実物資料が地下から明らかとなり、原住民の古代史の解明を追求する研究者たちにとって豊かなデータと様々な研究テーマを提供している。そうした研究の中でも「族」の問題は、研究者だけではなく一般の国民からも重要視されている。「族」とは何かについて、論理的に探究することは難しいものの、その形成プロセスを考古学から提示することは可能であると思われる。